

東国方言音韻考

江野 沢 淑 子

一

わが国では、古くから東国に特殊な方言があつて、中央の大和の言葉と音韻や語法の上に非常に相違があつた。その東国方言の特質を示しているのが、万葉集卷第十四であり、卷第廿の防人歌なのである。私は卷第十四に表れた上代の東国方言を検討したい。なお、検討に際して好都合なことは、万葉集卷第十四の殆んどが、一字一音で記載されていることである。

二

まず、万葉集卷第十四の中で、東国方言を最も多く使っている民謡は次の歌である。

諾児は和奴に故布奈毛多刀都久の奴賀奈敝ゆけば故布思可流奈母(三四七六)

即ち、1「われ」が「わぬ」と、エ音がウ音に転化し、2「恋ふらむ」が「恋ふなむ」と、子音変化(ラ音がナ音に)と母音変化(ウ音がオ音)している。3「たつつき」が「たどつき」となり、これも

ウ音がオ音に変化しているのである。更に4「ながらへ」が「ぬがなへ」とア音からウ音に母音変化し、5「こひしかるらむ」が「こぶしかるなむ」とイ音からウ音に訛っているのである。右の歌は一首三十一字の中で、五箇所も方言が存在しており、そのうち、1・4・5の一部、は母音変化をし、2の一部分のみ子音変化をしている。

さて東歌の音韻の転化は次のようになる。

1 母音変化した場合

- A (1)ア音に発音するはずのものがイ音に。(2)ア音がウ音に。(3)ア音がエ音に。
- B (1)イ音に発音するはずのものがウ音に。(2)イ音がエ音に。(3)イ音がオ音に。
- C (1)ウ音に発音するはずのものがア音に。(2)ウ音がイ音に。(3)ウ音がオ音に。
- D (1)エ音に発音するはずのものがア音に。(2)エ音がイ音に。(3)エ音がウ音に。(4)エ音がオ音に。
- E (1)オ音に発音するはずのものがイ音に。(2)オ音がウ音に。(3)オ音がオ音に。

がエ音に。

F 動詞の連体形がオ音に変わることが多い。

2 子音変化した場合

F スの音がソの音に。

G チの音がシの音に。

H テの音がシの音に。

I ナの音がアの音に。

J ムの音がウの音に。

K ラの音がナの音に。

L レの音がエの音に。

M 助動詞「らむ」が「なも」に。

三

右のように分けられるが、その例を挙げれば

A (1) ア音がイ音に。足利——安之我里(三四三二)(三三七〇) 阿之賀利(三四三二) 阿之我利(三三六八)(三三六九)

(2) ア音がウ音に。足悩む——安奈由牟(三五三三) 流らへゆけば——努、賀奈、敵ゆけば(三四七六)

(3) ア音がエ音に。小枝——故夜提(三四九二)

B (1) イ音がウ音に。月——都久たつ(三三九五)と都久(三四七六) 都久かたよる(三五六五) この月は、中央語でも、下に語が付いて熟語となる場合はツクとよまれるが、月一つの場合は、必ずツキと発音されるものであった。ところが東国方言では前記のようにツクというのである。なお、イ音からウ音に転化した名詞としては、虹——努自(三四一四)。新嘗——爾布奈米(三四六〇) 葦菲——久

君、美良(三四四四) 等がある。

(2) イ音がエ音に。清水——西、美度(三五四六) 悲しき——可奈之家(三五一七・三五三三・三五六四・三五五一) 我奈之家(三五〇〇) 可奈思家(三五七六) 可奈思家、世呂(三五四八) やすき——也、須家(三四八二) 悩しき——奈夜麻思家(三五五七) のように、東国方言の形容詞連体形の活用語尾を、「け」という場合が多いが、次のような例もある。かなしき——加奈思吉(三三五一) 可奈之伎(三三七三) 加奈之伎(三五四九) 可奈之伎、我(三四五一) おもしろき——於、毛思路伎(三四五二)。これらは中央語と音が等しいのであって、東国方言においては、形容詞連体形の語尾にき・け両様が存在した。

(3) イ音がオ音に。磯辺——於、思敵(三三五九) 磯辺——於、須比(三八五) 言痛りつも——許等、たかりつも(三四八二或本) 樵る——許流。(三四三三)

C (1) ウ音がア音に。蔓——伊波為都良(三三七八) (三四一六) 弦——都良(三四三七) 通ふ——可欲波(三五二六) 生る——乎布流(三五〇一)

(2) ウ音がイ音に。布——爾、努(三三五一) 布雲——爾、努具母(三五一一)

(3) ウ音がオ音に。雪——与、伎(三四二三) 兎——乎、佐芸(三五二九) 過し——見所、具思(三三六二) 現る——安良波路(三四一四) 降る——布路、与、伎(三四二三) 這ふのす——波抱、能須(三五二五) 告れる乃良路(三四六九) 住む——須毛(三五二七) 張れる川門——波良路、可波刀(三五四六) 待つ——万刀(三五六一) 引船——比古、布禰(三四三二) 立つ月——多刀、都久(三四七六) 行く——由胡、能須(三五四二) 危ふかど——安夜抱、可等(三五三九) しす——安騰須酒、香(三四二)

五六四)

助動詞「む」が「も」に。

伊麻波伊可爾世母(三四一八)和乎可豆佐禰母(三四三二)禰毛等可
児呂賀(三四七二)他に、(三四九四)(三四七六)(三五一六)(三四〇五)

等に、助動詞「む」が東国方言では「も」といったことが分る。

なお、東国方言でも「む」といった例も見うる。例えば我目保里
勢牟(三三八三)多賀家可母多牟(三四二四)がそれである。

D(1)エ音がア音に。小枝——故夜堤(三四九二)干せる——保佐流

(三三五一)降れる——布留留(三五〇一)、遠けば——登保可婆(三

三八三)等抱可、騰母(三四七三)よけば——余加婆(三四一〇)

なお、上代においては、形容詞に「け」「しけ」の形があつて、未然形と已然形に用いられていた。この「け」「しけ」という形が、東国方言では「か」という形になることがあつた。

(2)エ音がイ音に。山辺——夜麻備(三三五七)磯辺——於須比(三三八五)新嘗——爾布奈米(三四六〇)うちかへ——宇知可比(三四八二)

(3)エ音がウ音に。出づ——物能毛比豆都毛(三四四三)

(4)エ音がオ音に。照れば——刀礼婆(三五六一)

E(1)オ音がイ音に。磯辺——於思敏(三三五九)初む——美太礼志米
梅楊(三三六〇)

(2)オ音がウ音に。布——爾努(三三五二)布雲——爾努具母(三五

一三)磯辺——於須比(三三八五)おけら——宇家長(三三七六)

(3)オ音がエ音に。撥らす——西良思(三四三七)
オ音の変化は、一音丈でなく、「西美度」「故夜提」「於思敏」のように、相関係して表れることが多かった。

F 動詞の連体形がオ音に。引く舟——比古布禰(三四三二)立つ月——

多刀都久(三四七六)逢ふ時——阿抱思太(三四七八)沖に住む小
鴨——於吉爾須毛平加母(三五二七)張れる川門——波良路河波刀
(三五四六)

以上が母音変化による転化現象である。次に子音の変化は、

Fスの音がツに。さす——宇知比佐都(三五〇五)

Gチの音がシに。立ち多思(三三九五)放ち——波奈之(三四二〇)い
づち——伊豆思(三四七四)

Hテの音がシに。へだて——敏太思、

Iナの音がアに。なぜ——安是(三三六九)(三四三四)(三四六一)(三
四七二)(三五三三)(三五七六)阿是(三四六九)(三四一七)

Jムの音がウに。群立ち——宇良太知(三五五二)

Kラの音がナに。流らふ——奴賀奈敏(三四七六)

Lレの音がエに。乱れ——多知美多要(三五六三)

M助動詞「らむ」が「なも」に。和乎可麻都那毛(三五六三)思保美
都奈武賀(三三六六)於毛布奈牟(三四九六)故布思可流奈母(三四
九六)故布思可流奈母(三四七六)

以上のように東国方言と見做されるものは、すべてが音韻の転化現象であつて、中央語と異なるものではなかった。又、母音変化の方が、子音変化よりも適かに多かったことが判明する。

動詞・形容詞・助動詞は、その活用語尾に音韻の転化現象が表れている。しかし、中央語と同じ活用形をとるものもある。

特に動詞は、発音上の特色として、母音においては、uとoとの変化が最も多く、それに次いでiとeとの関係が目立っている。次いでiとu、eとe、aとo、aとu、aとo、iとo、uとe、

aとiとの関係を示している。

又、子音においては、nのドロップが多いのである。即ち、中央語で「なぜ」というところを、東国方言では「あぜ」という。次いでチの音がシの音に転ずるのも目立つ存在である。

四

次いで東国方言の音韻に関する問題に、いわゆる上代特殊仮名遣の混乱がある。即ち、上代においてアイウ以下の多くの仮名は、同音相通で用いられたが、特にエキケコソトヌヒヘミメヨロの十三音の仮名は各二類に分れその間に用法上の差別があった。これを上代特殊仮名遣という。この特殊仮名遣を発見したものは、本居宣長の学統をひく石塚龍麿であった。龍麿の上代特殊仮名遣についての研究書に『仮名遣奥山路』があり、東国方言について触れている。この研究は、当時、龍麿自身の文法上の考えが不充分であったため、正しいものを正しくないとした所が多く、その尤なるものが東国方言に関してであった。結論から先にいえば、当時、特殊仮名遣が行われていたのは、わが国の中央部だけであって、東国ではまだ行われていなかったのであるが、龍麿は東国にも行われていたと見做して、万葉集中の東国方言に「……正しからず」の例証を求めたのである。このことは、上代の東国方言の仮名がいかに混乱していたかを示すに足るものであろう。それゆえ、東国方言に見うる仮名遣の混乱を、『仮名遣奥山路』では巻第十四の用例を全部検討して、その問題点を「……正しからず」としている。その「正しからず」について、橋本進吉氏の『古代国語の音韻について』を参考にしつつ検討したい。なお、『かなづかひおくの山路』の条に「通用するか

なの多く用ひたるをば一つ二つあげてことごとしくはあげず皆ひとしければなり」とあり、『仮名遣奥山路』は主として、語彙に表われた仮名遣の問題を取り扱っている。

さて、『仮名遣奥山路』の中で、巻第十四の歌に関して「正しからず」とある用例は十九例を数えるが、問題点が次の三つに分けられる。

- 1、万葉集巻第十四の仮名遣における甲類の仮名と乙類の仮名との混同
- 2、万葉集巻第十四の仮名遣における音韻転訛について
- 3、その他。以上を検討する。

五

まず1の万葉集巻第十四の仮名遣における甲類の仮名と乙類の仮名との混同について考察したい。龍麿は次のような形で、十四例について、「……正しからず」としている。

〔氣〕あけ 氣ハ開ヲ用フ。万葉十四の廿丁(三四六一)に「安家ぬした」とあるは正しからず。

右の歌について解説を加えると、氣・開は乙類の仮名である。「あけぬした」は「明けぬ時」の意で、あけのけは、当然、乙類の氣か、開を用うべきであるのに、三四六一の歌は甲類である家を用いている故に「正しからず」というのである。なお、橋本氏は、乙類の仮名は氣・開のみでなく、他の仮名とも相通じて用いられることを万葉仮名類別表(「古代国語の音韻について」所収)に図示している。参考までに、ケの部を掲げる。

ケ

(清音) 邪計稽家奚雞鷄谿溪啓價賈結異

(濁音) 牙雅下夏覽

(清音) 氣開既概慨該階戒凱愷居舉希毛食餉消筍

(濁音) 宜義皚尋碍礙偈削

甲類

乙類

である。次いで『仮名遣奥山路』では、

〔氣〕 かけ懸 氣・該・既ヲ用フ。万葉十四ノ廿一丁(三四六八)に

「かかみを可家」とあるのは正しからず。

〔許〕 こそ 去・許・己・學ヲ用フ。万葉十四ノ十丁(三三九四)に

「わすらえこば古曾」とあるに正しからず。

〔備〕 び 備ヲ用フ。十四ノ八丁(三三八一)に「うな比」とあるは

正しからず。

〔閉〕 うへ 閉・杯ヲ用フ。万葉十四ノ十九丁(三四五六・夜蘇許登

乃敝波)三二丁(三五三九・安受及字敝爾)に敝を用ひたるは正

しからず。

さへ 閉・閉ヲ用フ。万葉集十四の卅二丁(三五四八・比等佐

敝余須母)に敝を用いたるは正しからず。

はへ 閉を用フ。万葉十四ノ廿九丁(三五二五)に「ことおろ

波敝とあるは正しからず。

〔米〕 め 米・梅・迷ヲ用フ。但し万葉十四の十六丁(三四三七)に

「馬きなばつらはか馬かも」同十丁(三三九四)に「なをかけ

なは賣」同十七丁(三四四一)に「あゆ賣くろごま」同十七丁

(三四四一)に「あゆ賣くろごま」同十八丁(三三四四)に「を

かのくくみらつれつ賣めば」同廿四丁(三四九三)に「なをこ

そまた賣」同廿八丁(三五二八)に「いさねし賣とら」なとか

ける皆正しからず。

以上の実例について検討すると、いずれも乙類を用いるはずの処を、東国方言が甲類を用いることより生じた誤謬である。その混乱は、ケ・ヘ・メに限られている。即ち、ケの部の仮名遣の混乱は、動詞の活用形に限られ、ヘの部の仮名遣の混乱で、特に動詞の場合には東歌特有なものである。更にメの部の混乱は、いずれも助動詞の場合に限られている。以上のケ・ヘ・メを通しいえることは、巻第十四の東歌には他の巻に殆んどない助詞・助動詞・動詞の仮名遣の混乱があることを、『仮名遣奥山路』によってうかがうことができる。

次に、2の「万集集巻第十四の仮名遣における音韻転訛」について同書では、その例として、「與伎」一語のみを挙げている。即ち、

〔用〕 たよら 欲ヲ用フ。多欲良(万葉十四ノ七丁)十四ノ十四丁

(三四三三)に雪ヲ與伎とかける與の字は不正なるべきか。

おほく由と欲とを通はして用ひたり。

と記している。龍曆の例示した三四二三の歌は、「上毛野伊香保の降る與伎の行き過ぎかてぬ妹が家のあたり」であって、龍曆は由伎の由と、與伎の與とは同音相通ゆえ、不正であろうかと、與伎の言葉の存在を認めない立場をとっているが、実は與伎はあくまでも與伎であって、東国方言の一特徴なのである。即ち、u音がo音に母音変化したものである。u音からo音への変化は、私の調べた範囲では、巻第十四の音韻変化中、最も多く、二十九例を得た。なお、実例として、数語を挙げる。「比古布禰乃」「多刀都久能」「乎佐芸禰良況里」「古麻乃由胡能須」「西美度波久末受等」がある。

次いで、どこに所屬させるか、いわゆる所屬不明が二語ある。

〔祁〕け 祁・雜・家計ヲ用フ。但し万葉十四ノ十一丁(三三九九)に、「くつ波氣わがせ」とあるは不正か。

〔氣〕簡・氣・該ヲ用フ。万葉卷第十四に「乎家」をあるは正しからず

石塚龍曆は、万葉集卷第十四の「正しからず」の例を以上のようにあげている。前記の説明の通り、龍曆も上代仮名遣の甲類乙類の在存を正しく認識していたならば、おそらく、東国方言のあり方を「正しからず」とはしなかったであろう。

六

東国方言の特殊語法として最も注意をひくものは打消の助動詞「なふ」である。それは「なは」「なふ」「なへ」と四段活用をする。

1 未例形「なは」の例。

さ衣の小筑波嶺ろの山の崎忘らば来こそ那乎可家奈波売 (三三九四)

他に(三三七二)の歌も、未然形に活用する部分を持っている。

2 連用形「なへ」の例。

「なへ」は原則として、已然形に活用するものであるが、山田孝雄氏の『奈良朝文法史』によると、連用形と連体形を兼ねている。その例を挙げる。

諸児は吾に恋ふなも立と月の努賀奈、敝由家婆恋しかるなも (三四七六)

3 終止形「なふ」の例

武蔵野の小岫が雉立ち別れ去にし宵より世呂爾安波奈、布與 (三

三七五)

他に(三五二五)(三五一六)(三四一九)等が「なふ」を用いている。

4 連体形「なへ」の例

奈良朝文法史は「なへ」は「なふの訛音なるもの」と説いている。

昼解けば等家奈、敝比毛乃わが背なに相倚るとかも夜解けやすけ (三四八三)

他に(三五二九)(三五五五)の歌がある。なお、例外として、連体形に「のへ」を用いた例がある。即ち左の歌がそれである。

遠しとふ故奈の白嶺に逢ほ時も安波乃、敝思太毛汝にこそ寄され (三四七八)

5 已然形「なへ」の例。

韓衣裾のうち交へ阿波奈、敝波禰奈、敝のからに言痛かりつも (或本三四八二)

他に(三四六六)(三五二四)(三五〇九)の歌がある。山田孝雄氏は、『奈良朝文法史』で「今これらを以て概括して考ふるにこは必ず上にいひしが如き四段形のものなりしならむ。然るに標準語中にその断片だけに発見せぬは、これ頗る古き語なりしにあらざるか。而して、そが東国方言にのみ遣り存せるものにあらざるか。果して然りとせば、こはその意義に於て「ぬ」に似たるごとく、或は「ぬ」といふ打消の語の継続的語法をあらはす「は・ひ・ふ・へ」にうつりゆきしものにあらざるか。然る時は「ぬ」は或時期に四段形にして「な・ぬ・ね」といひしにあらざるか。」と優れた考察をしている。

七

万葉集卷第十四に見える特殊語法としては「なす」がある。「なす」は如くの意で、佐伯梅友氏の「国語史 上古篇」では、「なす」は東歌以外の場合は体言をうける場合が多く、中央語においては用法が非常に固定してしまっているが、東歌においてはその点が甚だ自由である」と説く。「なす」の実例としては

鳴瀬ろに木都能余須奈須いとのきて愛しけ背ろが吾がり通はむ
(三五四八)

他に(三五三二)の歌がある。

なお、「なす」と同義のものに「のす」がある。形容詞的に用いられるものとしては、(三四二四)の歌がそれであり、句を導くものとしては(三四一三)(三五一四)(三五二五)(三五四一)(三五五二)の歌がそれである。

八

以上、万葉集卷第十四を、東国方言の特色及び、中央語との関連などから考察すると、次のことが判明する。

①東国方言における母音変化には、u音からo音への変化する語が最も多く、次いで、i音からe音への母音変化が多音変化が多い。

②子音変化では、nのドロップが多い。

③いわゆる上代特殊仮名遣は、当時、中央では行われていたが、東

国では未だ行なわれていなかった。(『仮名遣奥山路』は上代特殊仮名遣が東国でも行なわれているとしたために、語謬を生じた)

④打消の助動詞「なふ」は東国方言の特殊語法であるが、古くは中央語にも用いられ、東国方言にのみ残っていた。

以上より考察すると、東国方言は、中央語と全く異質なものでなく、中央語の訛音現象と見做しうる。又、東国方言は中央語の古形で、中央語と軌を一にしていることも考察される。

万葉集卷第十四に流れる素朴な心情、響きあう語感、情感表現の巧みさ、生活との密着さなどの内容と、その表現及び音韻が、すぐれた蒐集者の耳目にとまり、いわゆる東国民謡集として、二百三十首から成る万葉集卷十四がまとめられたのではあるまいか。

参考文献

- | | |
|------|-------------|
| 石塚龍麿 | 仮名遣奥山路 |
| 山田孝雄 | 奈良朝文法史 |
| 橋本進吉 | 古代国語の音韻について |
| 〃 | 国語音韻史 |
| 佐伯梅友 | 国語史 上古篇 |
| 室伏秀幸 | 万葉東歌 |